

第25回 郷土先賢室顕彰者紹介



黒部西瓜の品種改良と流水客土の実現に 力を尽くした農業技術者

伊東 森作 (1897~1997)

伊東森作は、明治30年(1897)に下新川郡大布施村(現黒部市大布施)に生まれた。

大正後期、三日市付近では丸型の黒部西瓜が栽培されていたが、奈良の大和西瓜に押され、売れなくなっていた。この窮状をみた森作は、農家の生活を助けたいと考え、大正12年(1923)から品種改良に取り組んだ。昭和6年(1931)、ようやくできた「新黒部西瓜一号」は、西瓜品評会で一等となったが、病気に弱くて収量も少なく、実用品種としての価値はなかった。森作は、その後も品種改良を続けたが、過労から病に倒れてしまった。結果を出せず改良を中止することに涙する森作は、入院を前に西瓜畑を見に行き、偶然カラスにつつかれ穴の空いた西瓜を見つけた。それほどおいしい西瓜であると察した森作は喜々として採種した。退院後、以前にも増して品種改良に取り組み、昭和13年(1938)、病気に強い「新黒部西瓜七号」の開発に成功した。西瓜の改良を志してから16年目のことであった。

昭和14年(1939)から郡農会(現農協)技師となった森作は、戦時体制として国を挙げた食糧増産のため来県した農林省の担当者の指示を受け、黒部川扇状地の宿命と言われた砂質浅耕土と冷水かけ流しの改善を考えるようになった。ちょうどその頃、東京帝大の塩入博士の研究の結果から、客土によって15~20%も多く収穫できることが分かった。しかし、問題はどのようにして事業化するかということであった。

昭和16年(1941)、森作は宇奈月の医師藤田与次に「わしの爺は土のない新屋村の石河原を拓き、そこへ泥水を一年中流し込んで千歩もある田圃を何十枚もつくったものだ」と聞き、実際の「泥流し」を見た。この時森作は、「赤土を泥水にして用水へ流し、水田まで運ばよいのではないか」というアイデアを思いつき、「流水客土」と名付けた。その後、魚津市木下新で実地試験を実施したが、終戦まで試験は思うようにできなかった。

昭和22年(1947)、一介の農業会技師に限界を感じた森作は、黒部川扇状地での流水客土を実現しようと県議会議員に立候補し当選した。森作は農林委員となり、流水客土の事業化に一途に取り組んだ。高松宮殿下産業視察の際には、流水客土の試験田を視察していただくという手段を講じた。それを見た下新川郡新屋村長袖野与太郎は、この事業こそ村を救う道であると考え、昭和24年(1949)7月、黒部川流水客土促進期成同盟会を結成。森作らの非常な努力の結果、日本初の流水客土が県営事業となった。

昭和26年(1951)に着手した流水客土は、昭和36年(1961)3月に完了した。米の収穫後の限られた時期に水圧ポンプで粘土を掘り削り、機械で微細にした泥水を全耕地に灌漑した結果、水田は保水力が改善されて水温が上がり、冷害が減少した。また、客土によって鉄分が多くなり秋落ちが減少、収量も増加した。

森作は、その後富山県農業会議事務局長、黒部市教育委員等を歴任。また、これまでの功労から褒章も授与された。晩年は「落葉樹は山を肥やす」の信念から、櫟の研究を進め、自ら育てた櫟を中国湖南省に送り、植樹した。平成9年2月死去。享年99歳、農民の生活をよくしたいとの信念を貫いた生涯であった。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



富山を慕い続けたノンフィクション作家

辺見 じゅん (1939~2011)

辺見じゅんは、昭和14年(1939)、角川書店を創業した角川源義と鈴木富美子の長女として、中新川郡水橋町(現富山市)に生まれた。本名、角川真弓。

水橋で6歳まで祖父母に育てられ、このとき聞いた民話のおもしろさが、後に民話の聞き書きへとつながった。高校時代には文芸会を結成し同人誌を創刊した。文学への憧れを深め、自分の行くべき道が文学しかないことを自覚していった。

辺見の文学は、民話や昔話の聞き取りから出発した。関係者一人一人を訪ねて丹念に、やがて相手にとって“母”のような存在として聞き取った。昭和51年(1976)、「呪われたシルク・ロード」が、第7回大宅壮一ノンフィクション賞の最終候補に残ったが、落選だった。平成2年(1990)、「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」で同賞を射止めた。

1970年代後半、各地を訪ね「ふるさと幻視行」等聞き書きを生かした作品を発表し、その途上で、昭和54年(1979)頃から戦艦大和の生存者を訪ねる旅を始めた。これが「男たちの大和」(1983)に結実する。辺見はこのときの聞き書きについて、対談で「だんだん母親のようになって聞くという不思議な気持ちにさせられました」と語っている。

辺見は短歌会を富山で始め、月1回指導に当たった。平成19年(2007)には「弦(げん)短歌会」を設立し、富山発の短歌文芸誌「弦」を創刊した。平成14年(2002)2月、「幻戯(げんぎ)書房」を東京都千代田区神田に設立した。晩年の源義の出版への思いを引き継いだのであった。

平成22年(2010)、「高志の国文学館」館長就任が内定。平成23年(2011)9月、東京都の自宅で脳出血のため急逝、享年72歳。開館10か月前であった。故郷富山への思慕を詠んだ辺見の歌碑が来館者を迎えている。